

斐伊川水系生態系ネットワーク全体構想(案)について

はじめに

斐伊川水系は、中国山地から出雲平野へと流れ出る斐伊川や神戸川をはじめ、ラムサール条約登録湿地の宍道湖・中海など、国際的にも評価される水辺環境に恵まれた流域である。

治水・利水・環境の観点からの水系内の各種河川整備の取り組みに一定の成果が得られつつある現在、全国的・国際的にも注目され得る豊かな水辺環境や生物多様性を最大限に活かした魅力的な川づくり・地域づくりを新たに展開させるべき絶好の時期を迎えている。

斐伊川水系は、ガン類、ハクチョウ類、ツル類、コウノトリ、トキという良好な生態系の指標となる、わが国を代表する5種群の大型水鳥類が、安定的に生息可能な潜在性を有した、わが国においても希有な地域である。このことに着目し、当地域において、河川を軸として、官民を越えた連携と協働に基づく、流域全体の生態系ネットワークの形成・強化を推進していくことで、良好な生態系を基盤とした持続可能な地域づくりが必ず実現するものと確信している。

こうした背景を受けて、生態系ネットワークの形成による大型水鳥類の舞う魅力的な流域づくりへの効果的な実現方策の検討を目的とした「斐伊川水系 生態系ネットワークによる大型水鳥類と共に生きる流域づくり検討協議会」を、2015年度に設立した。

本構想は、斐伊川水系とそれを取り巻く2県6市2町の望ましい姿と今後の取り組みについてとりまとめたものである。

1. 生態系ネットワークの概要

(1) 生態系ネットワークとは

生態系ネットワークとは、生物多様性が保たれた国土を実現するために、保全すべき自然環境や優れた自然条件を有している地域を核として、これらを有機的につなぐ取り組みである。

野生生物は、採食地や繁殖の場、休息する場など、さまざまな場を必要とし、それらの間を行き来・交流しながら、個体としての生活史や個体群を維持している。

多様な野生生物が生息できる自然生態系を、健全かつ安定的に存続させるためには、生物の生息に十分な規模の「核となる地域(コアエリア)」および、それを取り巻く「緩衝帯(バッファゾーン)」を適切に配置・保全するとともに、これらの生物生息・生育空間の「つながり(コリドー)」を確保すること、すなわち、生態系ネットワーク(=エコロジカル・ネットワーク)を形成していくことが有効である。

コアエリア:

生物の繁殖のための巣や食物を採る場所、休息をとる場所など、保全上中核となる場所のこと。

コリドー:

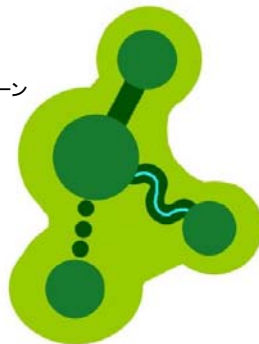
コアエリアの間の行き来を可能とする環境のこと。

バッファゾーン:

コアエリアやコリドーの周辺地域で、外部からの負の影響を緩和する役割を果たす地帯のこと。

凡例

- コアエリア
- バッファゾーン
- ≡ コリドー



(2) 生態系ネットワーク形成に取り組む目的

生態系ネットワークの形成は、自然生態系を守り育て、未来に継承するだけでなく私たちの社会活動、経済活動に様々な恵みをもたらす可能性も秘めている。

斐伊川水系を取り巻く自然条件・社会条件は、生態系ネットワークの形成や、自然環境を活かした地域振興を進める上で、全国有数の好条件を備えた地域となっている。

生態系ネットワークの形成に向けた取り組みを行うことは、単に地域の自然環境が豊かになるだけでなく、各機関が連携した取り組みを行うことで様々な地域振興や経済活性化に活かすことが期待できる。

人口減少しながらも、大都市圏との対流をおこすための「内燃機関」の構築・確保

- ・避けることが困難な、全国レベルでの人口減少の潮流
- ・地方から都市部への流出超過、人口の地域的な偏在(スロー効果)

おとずれてみたい、住んでみたい、持続可能なまちづくり

- ・世界に例を見ない超高齢社会への移行
- ・国家間、都市間での人やモノ、情報を巡る競争の激化
- ・まちとしての活力の低下の懸念



- ・良好な自然環境の喪失による、生物多様性の損失
- ・生態系サービスの低下に起因する各種産業の衰退
- ・気候変動の影響等による、農業生産の不確実性増大
- ・新興国の経済発展・人口増に伴う食料等の価格上昇

過去に失われた自然環境の保全・再生と、その持続可能な利用

- ・風水害、土砂災害の頻発・激甚化の懸念
- ・地球温暖化に伴う気候変動によるリスクの増大
- ・都市化・土地の高度利用に伴う社会的脆弱性の増大
- ・防災・減災施設を始めとする社会資本の老朽化

自然環境を活用した土地利用、社会資本整備(グリーンインフラ)の推進

斐伊川水系を取り巻く自然条件

- 斐伊川水系は、ラムサール条約登録湿地に象徴される、多くの大型水鳥類が集まる国際的評価の得られた豊かな水辺環境を有している。
- 特に、わが国の陸水域に生息する希少な大型水鳥類は、①ハクチョウ類 ②ガン類 ③ツル類 ④コウノトリ ⑤トキの5つに大別されるが、これら全てが安定的に生息可能となる潜在性を持つ地域は、斐伊川水系が国内唯一である。

斐伊川水系を取り巻く社会条件

- 生態系ネットワークの推進が、国の主要環境政策として位置付けられている。
- 河川や農地等での関連環境施策の集積が見られ、生態系ネットワーク形成のテーマに基づく官民の広域連携による一体的な活動や事業化を進めるうえでの施設や人材ストックが充実している。
- 現在、佐渡市のトキや豊岡市のコウノトリ等々、大型水鳥類をシンボルとした地域振興が活発化しているが、斐伊川水系では地域固有の全国や海外にアピール可能な資源価値を有している。

(3) 目標

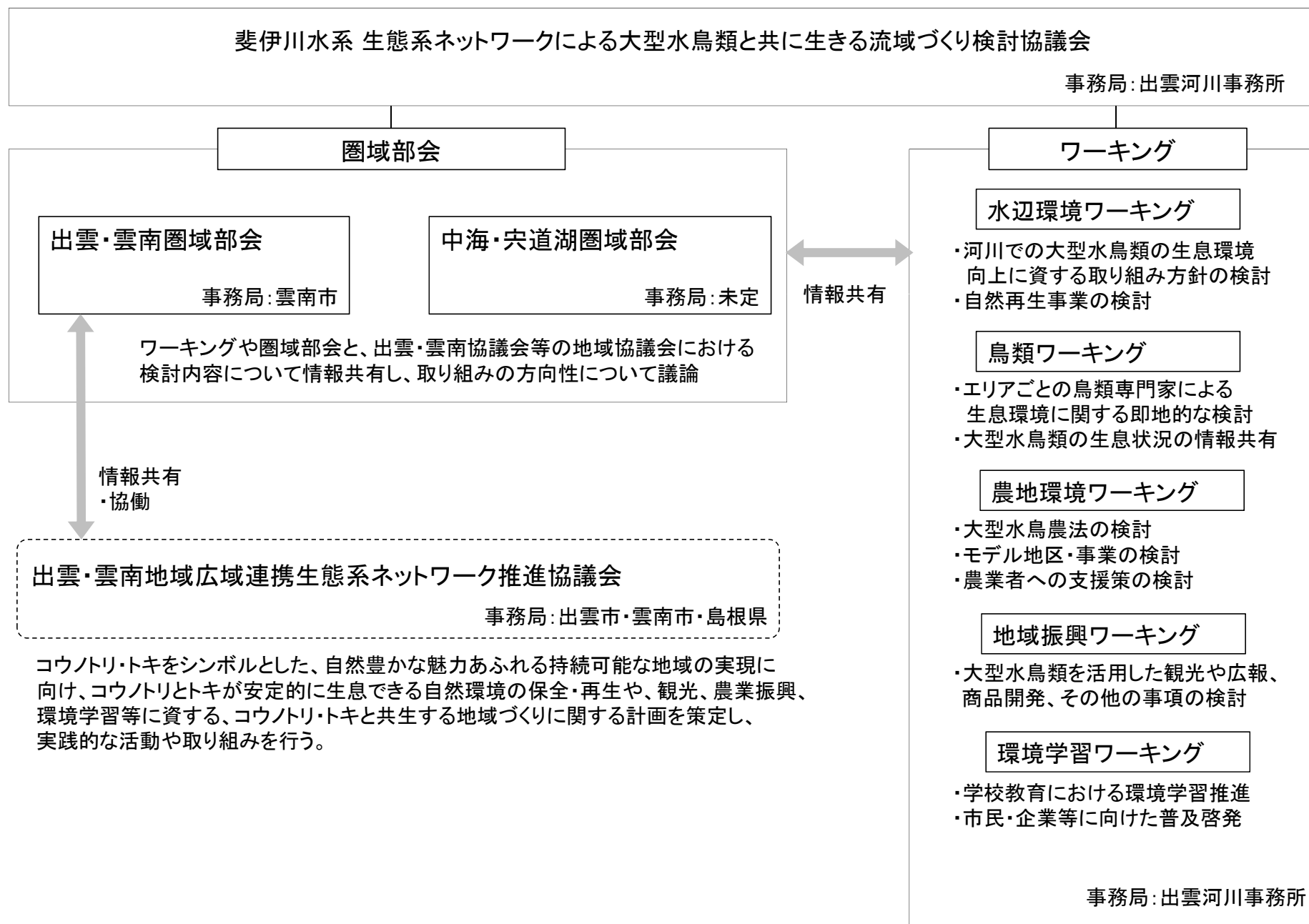
斐伊川水系生態系ネットワーク形成の目標として、到達目標(～2050年)、中期目標(～2035年)と短期目標(～2025年)の3つのフレームを、以下のように設定する。

【到達目標(～2050年)】	
- 斐伊川源流部から河口まで、河川・湖沼を軸とした生態系ネットワークが形成され、自然と共存する持続可能な地域づくりが実現している。 - 農村地帯では、自然の循環機能を活かした、生物多様性保全を始めとする多面的機能が強く発揮される生産手法での農業が普及し、カエル類やトンボ類、ミツバチなど農村地帯に生息する地域在来の生物が安定して見られる。 - 指標大型水鳥類をシンボルとした農産物がブランド化され、流域内外で広く知られている。ホテルやレストラン、道の駅などでも料理や土産物として利用されている。 - 生態系ネットワークの形成により、地域在来の野生生物の保全状況が改善され、河川・湖沼において水産資源も安定して得られるようになる。肉食の水鳥と水産資源を分け合う、持続可能な漁業が流域の水産資源ブランドとして、内外に広く知られている。農産物と同様、ホテルやレストラン、道の駅等でも料理や土産物として利用されている。 - 全国レベルの人口減少に伴い流域自治体の人口も減少しながらも、一方で持続可能な農業や水産業、観光業等を通じて、大都市圏との人・モノ・情報の対流が継続している。	
- ハクチョウ類・ガン類 - 引き続き、越冬個体群が維持されており、宍道湖西岸や湖北平野、能義平野を中心に、日中は水田で落穂や二番穂等を安心して採食する姿がごく普通に見られている。 - ナベヅル・マナヅル - 流域全体で数百羽規模の越冬個体群を形成し、ハクチョウ類、ガン類と同様、日中は水田で落穂や二番穂等を安心して採食する姿がごく普通に見られている。 - 流域以外でも西日本を中心にナベヅル・マナヅルの新たな越冬地づくりが実現し、感染症による絶滅リスクが低下。環境省レッドリスト等において絶滅の危機を脱したと評価されている。	- コウノトリ - 斐伊川水系の流域の圏域各地で営巣・繁殖し、河川や水田・水路などで、年間を通して観察することのできる身近な野鳥となっている。 - 全国でも豊岡市以外の全国各地でコウノトリの繁殖個体群が形成され、環境省レッドリスト等において絶滅の危機を脱したと評価されている。 - トキ - 斐伊川水系の流域を含む全国各地でトキの繁殖個体群が形成され、環境省レッドリスト等において絶滅の危機を脱したと評価されている。
【中期目標(～2035年)】	
- 生息環境づくり - ハクチョウ類、ガン類の越冬個体群について、ねぐらや採食地の保全・再生に向けた取り組みをさらに進め、外敵の侵入などのかく乱に対しても、圏域全体で越冬個体群を安定して支えられる生息環境を確保する。 - 毎年数十羽単位以上のツル類が越冬し、周辺水田などで採食している姿が見られるよう、ナベヅル、マナヅルにとって好適なねぐら環境を流域全体で一か所以上確保する。 - 流域全体でコウノトリ繁殖個体群の形成、さらに日本全国、および東アジアにおける個体群間の交流に向けた生息環境づくりを進める。 - 佐渡以外の地域においてトキの野生復帰の取り組みが始まっている。流域では出雲市等で、自然条件下での営巣・繁殖に向けた取り組みを進める。	- 地域づくり ～貴重な自然環境の価値を基礎として、経済を発展させる～ - 生物多様性保全型の農業を自治体各地で進め、圏域自治体やJA等の連携のもと流通・販売体制を整備する。 - 指標大型水鳥類の生息環境づくりに資する農産物や加工品の商品開発を進め、生態系ネットワークの取り組みの知名度を高める。 - 大型水鳥類をシンボルとした自然景観を観光資源としたツアーガイドを養成する体制をつくる。
【短期目標(～2025年)】	
- 生息環境づくり - ハクチョウ類、ガン類の越冬個体数について、少なくとも現状(2015年度時点)を維持できるだけの環境(ねぐら、採食地、休息地)を確保する。 - 散発的に飛来しているナベヅル、マナヅルの越冬に必要な環境条件に関する調査・分析を行い、生息環境づくりに向けた取り組みを始める。 - 国管理河川を中心に先行的に取り組まれている、生息環境づくりに資する取り組みの効果を検証し、他地域への適用に向けた取り組みを始める。 - 雲南市におけるコウノトリのペアの生息・営巣条件について調査・分析を行い、課題とされる点については生息環境づくり、地域づくり両面からの改善に向けた取り組みを始める。	- 地域づくり ～わが国においても希有な自然環境の価値を、地域の人々に知ってもらおう～ - 斐伊川水系生態系ネットワークの取り組みについて、愛称やロゴマークなどとともに、圏域内外に向けた広報を進める。 - 中海・宍道湖圏域、および、出雲・雲南圏域において、学校・団体等を対象に、大型水鳥類を軸とした自然環境学習を推進する体制をつくる。 - 大型水鳥類をシンボルとする自然景観を観光資源としたツアーを商品化し、年に1回以上は実施する。 - 各主体の地域づくりや生息環境づくりに向けた取り組みをマンパワーや財政、広報などで支える体制を、流域内外の事業者などを中心に形成する。 - 雲南市におけるコウノトリのペアの生息・営巣条件について調査・分析を行い、課題とされる点については生息環境づくり、地域づくり両面からの改善に向けた取り組みを始める。(再掲)

7. 推進体制

生態系ネットワークの形成等を効果的に進めるための推進体制を、以下に示す。

図表 推進体制



全体構想（案） 第6回協議会提出時からの主な変更点

No.	頁	ご意見・修正指示等	対応	
			旧（第6回協議会提出段階）	新（現案）
1	P. 1	「はじめに」の三段落目について、「多くの人々へのアピール度が高いこれら大型水鳥類5種群を良好な生態系の指標として着目」とあるが、淡泊すぎるので、当水系が生態系の指標から見ても希有な地域であることを強調してはどうか。 自然に恵まれた希有な地域であると確証しており、それが地域振興につながる…という流れにしてはどうか。これからの観光には個性が重要であり、この地域は希有な自然環境という個性があり、必ず地域活性化に寄与するものと確信している。だから環境をよりよくし、地域振興を進めていく、2段構えの流れにしてはどうか。 (涌井会長)	斐伊川水系は全国で唯一わが国を代表するガン類・ハクチョウ類・ツル類・コウノトリ・トキの大型水鳥類が安定的に生息可能な潜在性を有した地域であり、多くの人々へのアピール度が高いこれら大型水鳥類5種群を「良好な生態系の指標」として着目、官民を越えた連携と協働に基づく河川を軸とした流域全体の生態系ネットワークの推進と地域活性化と経済振興を達成する地域づくりの実現が期待される。	斐伊川水系は、ガン類・ハクチョウ類・ツル類・コウノトリ・トキという良好な生態系の指標となる、わが国を代表する5種群の大型水鳥類が、安定的に生息可能な潜在性を有した、わが国においても希有な地域である。このことに着目し、当地域において、河川を軸として、官民を越えた連携と協働に基づく、流域全体の生態系ネットワークの形成・強化を推進していくことで、良好な生態系を基盤とした持続可能な地域づくりが必ず実現するものと確信している。
2	P. 1	「（1）生態系ネットワークとは」の後に、定義を挿入する。（事務局）	-	生態系ネットワークとは、生物多様性が保たれた国土を実現するために、保全すべき自然環境や優れた自然条件を有している地域を核として、これらを有機的につなぐ取り組みである。
3	P. 19	「2019年3月策定（予定）」 →「（予定）」を削除（雲南市）	幸せを運ぶコウノトリと共生するまちづくりを進め、雲南市のブランド価値の向上を図るために、つくられたビジョン。2019年3月策定（予定）。	幸せを運ぶコウノトリと共生するまちづくりを進め、雲南市のブランド価値の向上を図るために、つくられたビジョン。2019年3月策定。
4	P. 20	目的「斐伊川水系における大型水鳥と共に生きる魅力的な流域づくりを目指す」 →「流域づくり」でとめるか。または「流域を目指す」でどうか（雲南市）	斐伊川水系における大型水鳥類と共に生きる魅力的な流域づくりを目指す。	斐伊川水系における大型水鳥類と共に生きる魅力的な流域づくり。

No.	頁	ご意見・修正指示等	対応	
			旧（第6回協議会提出段階）	新（現案）
5	P. 21	短期目標、および中期目標の年度を実情にあわせ修正。（事務局）	生物多様性条約締約国会議で採択された「愛知目標」を踏まえ、到達目標（～2050年）と短期目標（～2020年）に、中期目標（～2030年）を加えた3つのフレームを設定した。 （表中の目標年も同じく修正）	斐伊川水系生態系ネットワーク形成の目標として、到達目標（～2050年）、中期目標（～2035年）と短期目標（～2025年）の3つのフレームを、以下のように設定する。
6	P. 21	地域づくりの短期目標、中期目標について、地域づくりについてはそれぞれ何をしていくのか、協議会の委員のモチベーションが上がるよう、わかりやすく端的に表すストーリーを挿入してはどうか。簡単な言葉が望ましい。 なお、生息環境づくりについては、おおむね種ごとに整理されているので必要ない。（涌井会長）	-	（中期目標-地域づくりの各項目の前に、以下の一文を入れる） 「～貴重な自然環境の価値を基礎として、経済を発展させる～」 （短期目標-地域づくりの各項目の前に、以下の一文を入れる） 「～わが国においても希有な自然環境の価値を、地域の人々に知ってもらおう～」
7	P. 32	出雲・雲南圏域部会規約（案）第5条により、同部会の事務局を「雲南市」とする。	出雲・雲南圏域部会 事務局：地方自治体	出雲・雲南圏域部会 事務局：雲南市
8	P. 32	推進体制について、協議会規約の修正に伴い、各WGの検討内容や役割（分担）を再整理。（事務局）	（地域振興ワーキング） ・ 水鳥の観光への活用やPR手法等 ・ 農産物の付加価値化や販売方法等	（地域振興ワーキング） ・ 大型水鳥類を活用した観光や広報、商品開発、その他の事項の検討

はじめに

斐伊川水系は、中国山地から出雲平野へと流れ出る斐伊川や神戸川をはじめ、ラムサール条約登録湿地の宍道湖・中海など、国際的にも評価される水辺環境に恵まれた流域である。

治水・利水・環境の観点からの水系内の各種河川整備の取り組みに一定の成果が得られつつある現在、全国的・国際的にも注目され得る豊かな水辺環境や生物多様性を最大限に活かした魅力的な川づくり・地域づくりを新たに展開させるべき絶好の時期を迎えている。

斐伊川水系は、ガン類、ハクチョウ類、ツル類、コウノトリ、トキという良好な生態系の指標となる、わが国を代表する5種群の大型水鳥類が、安定的に生息可能な潜在性を有した、わが国においても希有な地域である。このことに着目し、当地域において、河川を軸として、官民を越えた連携と協働に基づく、流域全体の生態系ネットワークの形成・強化を推進していくことで、良好な生態系を基盤とした持続可能な地域づくりが必ず実現するものと確信している。

こうした背景を受けて、生態系ネットワークの形成による大型水鳥類の舞う魅力的な流域づくりへの効果的な実現方策の検討を目的とした「斐伊川水系 生態系ネットワークによる大型水鳥類と共に生きる流域づくり検討協議会」を、2015年度に設立した。

本構想は、斐伊川水系とそれを取り巻く2県6市2町の望ましい姿と今後の取り組みについてとりまとめたものである。

1. 生態系ネットワークの概要

No.2 (1) 生態系ネットワークとは

生態系ネットワークとは、生物多様性が保たれた国土を実現するために、保全すべき自然環境や優れた自然条件を有している地域を核として、これらを有機的につなぐ取り組みである。

野生生物は、採食地や繁殖の場、休息する場など、さまざまな場を必要とし、それらの間を行き来・交流しながら、個体としての生活史や個体群を維持している。

多様な野生生物が生息できる自然生態系を、健全かつ安定的に存続させるためには、生物の生息に十分な規模の「核となる地域(コアエリア)」および、それを取り巻く「緩衝帯(バッファゾーン)」を適切に配置・保全するとともに、これらの生物生息・生育空間の「つながり(コリドー)」を確保すること、すなわち、生態系ネットワーク(=エコロジカル・ネットワーク)を形成していくことが有効である。

コアエリア:

生物の繁殖のための巣や食物を採る場所、休息をとる場所など、保全上中核となる場所のこと。

コリドー:

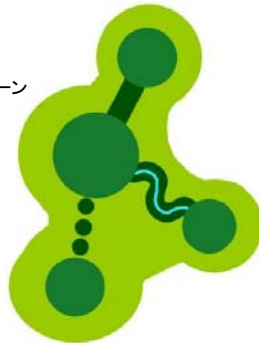
コアエリアの間の行き来を可能とする環境のこと。

バッファゾーン:

コアエリアやコリドーの周辺地域で、外部からの負の影響を緩和する役割を果たす地帯のこと。

凡例

- コアエリア
- バッファゾーン
- ≡ コリドー



(2) 生態系ネットワーク形成に取り組む目的

生態系ネットワークの形成は、自然生態系を守り育て、未来に継承するだけでなく私たちの社会活動、経済活動に様々な恵みをもたらす可能性も秘めている。

斐伊川水系を取り巻く自然条件・社会条件は、生態系ネットワークの形成や、自然環境を活かした地域振興を進める上で、全国有数の好条件を備えた地域となっている。

生態系ネットワークの形成に向けた取り組みを行うことは、単に地域の自然環境が豊かになるだけでなく、各機関が連携した取り組みを行うことで様々な地域振興や経済活性化に活かすことが期待できる。

人口減少しながらも、大都市圏との対流をおこすための「内燃機関」の構築・確保

- ・避けることが困難な、全国レベルでの人口減少の潮流
- ・地方から都市部への流出超過、人口の地域的な偏在(スロー効果)

おとずれてみたい、住んでみたい、持続可能なまちづくり

- ・世界に例を見ない超高齢社会への移行
- ・国家間、都市間での人やモノ、情報を巡る競争の激化
- ・まちとしての活力の低下の懸念



- ・良好な自然環境の喪失による、生物多様性の損失
- ・生態系サービスの低下に起因する各種産業の衰退
- ・気候変動の影響等による、農業生産の不確実性増大
- ・新興国の経済発展・人口増に伴う食料等の価格上昇

過去に失われた自然環境の保全・再生と、その持続可能な利用

- ・風水害、土砂災害の頻発・激甚化の懸念
- ・地球温暖化に伴う気候変動によるリスクの増大
- ・都市化・土地の高度利用に伴う社会的脆弱性の増大
- ・防災・減災施設を始めとする社会資本の老朽化

自然環境を活用した土地利用、社会資本整備(グリーンインフラ)の推進

斐伊川水系を取り巻く自然条件

- 斐伊川水系は、ラムサール条約登録湿地に象徴される、多くの大型水鳥類が集まる国際的評価の得られた豊かな水辺環境を有している。
- 特に、わが国の陸水域に生息する希少な大型水鳥類は、①ハクチョウ類 ②ガン類 ③ツル類 ④コウノトリ ⑤トキの5つに大別されるが、これら全てが安定的に生息可能となる潜在性を持つ地域は、斐伊川水系が国内唯一である。

斐伊川水系を取り巻く社会条件

- 生態系ネットワークの推進が、国の主要環境政策として位置付けられている。
- 河川や農地等での関連環境施策の集積が見られ、生態系ネットワーク形成のテーマに基づく官民の広域連携による一体的な活動や事業化を進めるうえでの施設や人材ストックが充実している。
- 現在、佐渡市のトキや豊岡市のコウノトリ等々、大型水鳥類をシンボルとした地域振興が活発化しているが、斐伊川水系では地域固有の全国や海外にアピール可能な資源価値を有している。

(5) 大型水鳥類に関連した地域づくりの取り組み・施設等

◆自治体の構想・計画

・出雲市トキによるまちづくり構想(出雲市)

トキをシンボルとして人と自然が共生できる地域づくりの推進を理念とし、「トキの保護増殖事業」、「自然環境の保全再生」、「産業・文化・教育との相乗効果」に取り組む構想。2011年に、出雲市トキによるまちづくり推進協議会において策定。

・“幸せを運ぶコウノトリ”と共生するまちづくりビジョン(雲南市)

No.3 幸せを運ぶコウノトリと共生するまちづくりを進め、雲南市のブランド価値の向上を図るために、つくられたビジョン。2019年3月策定。ビジョンの期間は2019年度から10年間とし、5年後の2023年度に見直しを行う予定となっている。本ビジョンを具体化し着実に実行するため、2019年度にアクションプランを策定予定。

◆環境学習

・トキ公開施設(出雲市)・トキ学習コーナー(出雲市・いずも朱鷺21)

公開施設は、トキの野生復帰や分散飼育の意義などについて、広く国民の理解を深める機会とするため、トキの繁殖に影響の少ない7月～12月にトキを見学可能。トキ学習コーナーでは、飼育トキのライブ映像やトキ近縁種の生態を観察することが可能。

・宍道湖グリーンパーク(ホシザキグリーン財団)

宍道湖西岸に位置し、湖岸に隣接する野鳥観察舎やビオトープ池を擁する。

・米子水鳥公園(米子市・中海水鳥国際交流基金財団)

ネイチャーセンターとラムサール条約登録湿地の一部のビオトープからなる。

・コウノトリ学習の実践(雲南市立西小学校)

コウノトリの生態を通じて、地域の自然環境や生態系の豊かさ、いのちの豊かさ、人間との共生、地域への愛着など、多岐にわたる環境学習、地域学習を全学年で展開している。

◆農地環境

・大型水鳥を育むお米

(ファーム宇賀荘・ゆとりの里 下古志ファーム13・未来守ネットワーク)

無農薬、無化学肥料の水田での冬期湛水や、減農薬、減化学肥料の水田で秋耕回避を行い、ハクチョウ類、ガン類等の大型水鳥類にとって好適な環境づくりを実践。収穫した米は「どじょう米」や「湖北はくちょう米」等として販売。水田には200～1000羽のハクチョウ類が飛来している。また、中海の水質悪化を招く海藻から製造された「海藻肥料」により育てられた米は、「海藻米ひな」として販売されている。

◆地域振興

・大型水鳥ミニリーフレットの配布(斐伊川水系生態系ネットワーク協議会)

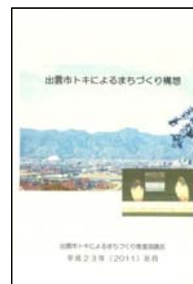
・「野鳥の楽園 観察会ツアー」の実施(出雲観光協会)

専門ガイドが同行し、雲南市に生息するコウノトリや、斐伊川河口部の水田等で越冬するハクチョウ類、ガン類等、宍道湖へねぐら入りするマガンの群れなどを観察。

・「鳥たちのねぐら入りフライト観察」がセットになった宿泊プランの企画(出雲観光協会)

・「わたりどりサブレ～マガン」の製造、販売(ラクレームデクレーム)

大型水鳥を育む農法で生産された米を使い、マガンをかたどったサブレを製造販売。



出雲市トキによる
まちづくり構想



“幸せを運ぶコウノトリ”と共生
するまちづくりビジョン(案)



トキ学習コーナー



宍道湖グリーンパーク



米子水鳥公園



西小チャレンジ田んぼ



大型水鳥類を観察するツアー参加者



わたりどりサブレとカード

4. 斐伊川水系における生態系ネットワーク形成の目的、および、目標設定

斐伊川水系生態系ネットワーク形成等の目的、および、目標設定を、以下のように設定する。

(1) 目的

斐伊川水系生態系ネットワーク形成の目的を、以下とする。

No.4

斐伊川水系における大型水鳥類と共に生きる魅力的な流域づくり

(2) 斐伊川水系生態系ネットワーク形成の基本方針

斐伊川水系における、大型水鳥類を指標とした生態系ネットワーク形成の基本方針を、以下のように定める。

● 基本方針1 河川を軸として地域の自然を広げ、つなぐ。

斐伊川水系は、斐伊川、宍道湖、中海、そして神戸川と、ラムサール条約登録湿地に象徴される全国的、国際的にも豊かで多様な水辺環境を有する流域である。

そこで、良好な生態系の指標として、また多くの人々へのアピール性が高い大型水鳥類に着目し、多様な主体の連携と協働に基づく河川を軸とした流域全体の生態系ネットワークの形成を進める。

● 基本方針2 地域の魅力や活力の向上につなげる。

大型水鳥類を指標とした生態系ネットワークを形成するためには、堤外地の河川や湿地での生息環境づくりに加え、堤内地での取り組みも必要であり、それらを支える地域の人々の理解と協力が不可欠である。

そこで、この取り組みが地域の人々に豊かさをもたらす実感を得られるよう、農産物の付加価値化や持続可能な観光等を進め、地域の魅力や活力の向上を目指す。

● 基本方針3 人と自然、人と人の絆を深める。

斐伊川水系は、ハクチョウ類、ガン類の西日本最大の渡来地であり、全国から野鳥愛好家を惹きつける程の希少性や多様性をもち、その特有の渡りルートや生態等は学術的にも注目されている。また、ツル類、コウノトリ、トキもかつての主要な生息地であり、野生復帰に伴う分散化候補地としての社会的な要請が高まっている。

そこで、流域の住民、NPOなどの団体、企業、大学等の研究機関、行政等の様々な人や組織が協働し、地域の自然と自然がつながるとともに、その担い手である人と自然、人と人との絆も深めていくことを目指す。

No.5 (3) 目標

斐伊川水系生態系ネットワーク形成の目標として、到達目標(～2050年)、中期目標(～2035年)と短期目標(～2025年)の3つのフレームを、以下のように設定する。

【到達目標(～2050年)】	
- 斐伊川源流部から河口まで、河川・湖沼を軸とした生態系ネットワークが形成され、自然と共存する持続可能な地域づくりが実現している。 - 農村地帯では、自然の循環機能を活かした、生物多様性保全を始めとする多面的機能が強く発揮される生産手法での農業が普及し、カエル類やトンボ類、ミツバチなど農村地帯に生息する地域在来の生物が安定して見られる。 - 指標大型水鳥類をシンボルとした農産物がブランド化され、流域内外で広く知られている。ホテルやレストラン、道の駅などでも料理や土産物として利用されている。 - 生態系ネットワークの形成により、地域在来の野生生物の保全状況が改善され、河川・湖沼において水産資源も安定して得られるようになる。肉食の水鳥と水産資源を分け合う、持続可能な漁業が流域の水産資源ブランドとして、内外に広く知られている。農産物と同様、ホテルやレストラン、道の駅等でも料理や土産物として利用されている。 - 全国レベルの人口減少に伴い流域自治体の人口も減少しながらも、一方で持続可能な農業や水産業、観光業等を通じて、大都市圏との人・モノ・情報の対流が継続している。	
ハクチョウ類・ガン類 - 引き続き、越冬個体群が維持されており、宍道湖西岸や湖北平野、能義平野を中心に、日中は水田で落穂や二番穂等を安心して採食する姿がごく普通に見られている。 ナベヅル・マナヅル - 流域全体で数百羽規模の越冬個体群を形成し、ハクチョウ類、ガン類と同様、日中は水田で落穂や二番穂等を安心して採食する姿がごく普通に見られている。 - 流域以外でも西日本を中心にナベヅル・マナヅルの新たな越冬地づくりが実現し、感染症による絶滅リスクが低下。環境省レッドリスト等において絶滅の危機を脱したと評価されている。	コウノトリ - 斐伊川水系の流域の圏域各地で営巣・繁殖し、河川や水田・水路などで、年間を通して観察することのできる身近な野鳥となっている。 - 全国でも豊岡市以外の全国各地でコウノトリの繁殖個体群が形成され、環境省レッドリスト等において絶滅の危機を脱したと評価されている。 トキ - 斐伊川水系の流域を含む全国各地でトキの繁殖個体群が形成され、環境省レッドリスト等において絶滅の危機を脱したと評価されている。
【中期目標(～2035年)】 No.5	
生息環境づくり - ハクチョウ類、ガン類の越冬個体群について、ねぐらや採食地の保全・再生に向けた取り組みをさらに進め、外敵の侵入などのかく乱に対しても、圏域全体で越冬個体群を安定して支えられる生息環境を確保する。 - 毎年数十羽単位以上のツル類が越冬し、周辺水田などで採食している姿が見られるよう、ナベヅル、マナヅルにとって好適なねぐら環境を流域全体で一か所以上確保する。 - 流域全体でコウノトリ繁殖個体群の形成、さらに日本全国、および東アジアにおける個体群間の交流に向けた生息環境づくりを進める。 - 佐渡以外の地域においてトキの野生復帰の取り組みが始まっている。流域では出雲市等で、自然条件下での営巣・繁殖に向けた取り組みを進める。	地域づくり ～貴重な自然環境の価値を基礎として、経済を発展させる～ - 生物多様性保全型の農業を自治体各地で進め、圏域自治体やJA等の連携のもと流通・販売体制を整備する。 - 指標大型水鳥類の生息環境づくりに資する農産物や加工品の商品開発を進め、生態系ネットワークの取り組みの知名度を高める。 - 大型水鳥類をシンボルとした自然景観を観光資源としたツアーガイドを養成する体制をつくる。
【短期目標(～2025年)】 No.5	
生息環境づくり - ハクチョウ類、ガン類の越冬個体数について、少なくとも現状(2015年度時点)を維持できるだけの環境(ねぐら、採食地、休息地)を確保する。 - 散発的に飛来しているナベヅル、マナヅルの越冬に必要な環境条件に関する調査・分析を行い、生息環境づくりに向けた取り組みを始める。 - 国管理河川を中心に先行的に取り組まれている、生息環境づくりに資する取り組みの効果を検証し、他地域への適用に向けた取り組みを始める。 - 雲南市におけるコウノトリのペアの生息・営巣条件について調査・分析を行い、課題とされる点については生息環境づくり、地域づくり両面からの改善に向けた取り組みを始める。	地域づくり ～わが国においても希有な自然環境の価値を、地域の人々に知ってもらおう～ - 斐伊川水系生態系ネットワークの取り組みについて、愛称やロゴマークなどとともに、圏域内外に向けた広報を進める。 - 中海・宍道湖圏域、および、出雲・雲南圏域において、学校・団体等を対象に、大型水鳥類を軸とした自然環境学習を推進する体制をつくる。 - 大型水鳥類をシンボルとする自然景観を観光資源としたツアーを商品化し、年に1回以上は実施する。 - 各主体の地域づくりや生息環境づくりに向けた取り組みをマンパワーや財政、広報などで支える体制を、流域内外の事業者などを中心に形成する。 - 雲南市におけるコウノトリのペアの生息・営巣条件について調査・分析を行い、課題とされる点については生息環境づくり、地域づくり両面からの改善に向けた取り組みを始める。(再掲)

No.6

No.6

7. 推進体制

生態系ネットワークの形成等を効果的に進めるための推進体制を、以下に示す。

図表 推進体制

